

滋賀県内には約1300箇所の城があったといわれており、全国でも屈指の多さを誇ります。その多くは、山に築かれたものですが、織田信長の登場以降、琵琶湖の支配を目的に湖岸に大きな城が築かれるようになりました。

1. 室町・戦国の城

中世の近江は、北近江を京極氏、浅井氏が、南近江を六角氏が支配しており、それぞれ拠点となる巨大な山城を築いていました。しかし、こうした高い山に築かれた巨大城郭はわずかで、ほとんどの城は低い里山に築かれた小規模なものでした。水荃岡山城(近江八幡市)や打下城(高島市)などの湖岸に築かれた城も、近くの湊をおさえて水運を掌握しようとするもので、琵琶湖全体の支配を意図するものではありませんでした。



写真3-2-1 八幡山から
水荃岡山城跡を臨む

2. 織田信長の城と琵琶湖

(1) 琵琶湖支配のはじまり

1568(永禄11)年の上洛から、織田信長は中世の琵琶湖水運を担っていた堅田衆などの湖上勢力と積極的に関わりを持ち、これらを掌握することにより琵琶湖支配に乗り出します。やがて、元龜争乱(1570～1573)を経て、近江を完全に掌握すると、湖岸の要所に城を築き、琵琶湖全体を支配する仕組みを作り上げました。

(2) 湖岸に築かれた城

1571(元龜2)年、明智光秀に坂本城(大津市)を築かせたのを皮切りに、信長は家臣に湖岸の要所に城を築かせます。1574(天正2)年に羽柴秀吉に長浜城(長浜市)を、1578(天正6)年に織田信澄に大溝城(高島市)を築かせ、1576(天正4)年に築城が始まる自身の居城安土城(近江八幡市・東近江市)と合わせて、琵琶湖を取り囲



写真3-2-2 湯水で姿を現した坂本城跡



むように拠点となる城を配置します。

いずれの城も城下に中世以来の湊を取り込み、近くを街道が通るなど水陸両方の交通の要所に築かれたことや、天守を持ち湖に突き出るような縄張など、共通点が多いことから、信長による計画的な築城であると考えられます。こうして信長による琵琶湖支配は完成しました。



写真3-2-3 安土城跡と西の湖

3. 豊臣・徳川の城と琵琶湖

1582(天正10)年、本能寺の変で織田信長が命を落とすと、豊臣秀吉が政権を握ります。秀吉は、織田政権の象徴である安土城を廃して八幡山城(近江八幡市)を築き、豊臣の天下の到来を広く世間に示しました。その一方で、信長時代から続く坂本城(後に廃城して大津城へ)、長浜城、大溝城を修築し、子飼いの家臣を城主とします。信長が作り上げた城による琵琶湖支配のシステムを秀吉も継承したのです。

しかし、秀吉は新たな琵琶湖支配のシステムも導入します。それが大津百艘船と湖水船奉行です。信長が、中世以来の湖上勢力を利用して琵琶湖を支配したのに対し、秀吉は新たな担い手を創出したのです。



写真3-2-4 八幡城下町と八幡山城跡



写真3-2-5 膳所城天守跡

1600(慶長5)年の関ヶ原の合戦で徳川家康が勝利すると、近江から豊臣勢力が一掃され、徳川譜代の家臣に領地が与えられました。また大津城にかわって膳所城(大津市)を、佐和山城(彦根市)にかわって彦根城を築かせます。家康は秀吉の作り上げた船奉行と大津百艘船による琵琶湖支配を継承しましたが、城による琵琶湖支配については継承しませんでした。八幡山城はすでに廃城となっており、長浜城や大溝城も廃城となります。膳所城も彦根城も湖岸に築かれたましたが、あくまで領域支配の拠点に過ぎません。こうして城による琵琶湖の支配は終わりを告げたのです。